

2017年(平成29年)

3月3日

金曜日

桃の節句



新聞・テレビがまず注目

在宅医療の看板を掲げて、町医者に転身したものの、往診を希望する患者は少なかった。在宅医療という言葉すら、一般にはなじみがない時代の無謀ともいえる挑戦だからやむを得ない。人気薄の中、いち早くスポーツライトをあててくれたのは

太田秀樹 ⑧

人生支える在宅医療

新聞やテレビだった。

現在神奈川県知事の黒岩祐治さんもその一人。当時はTV局のキャスターで、医療問題に関心が深く、訪問看護に焦点をあてた番組を企画してくれた。中学生のときにこの番組を見たことをきっかけに看護師をめざ

し、訪問看護を始めたという職員もいる。メディアへの露出度が高くなるにつれ患者も徐々に増えていった。

1990年代後半になり、介護保険制度の議論が始まると、厚生労働省からの視察があった。実際に往診同行を希望する医系技官もいた。がんの末期でも、生き生き穏やかに暮らす患者と出会い、病院では経験することがない患者の姿に感動し



おた・ひでき 1953年、奈良市生まれ。自治医大大学院修了。92年「おやま城北クリニック」開業。現在は医療法人アスムス理事長として在宅医療を推進。

て、政策からも在宅医療の普及推進をリードしてくれた。診療報酬でも有利な評価となつて、往診が診療所経営の足を引っ張るものでなくなった。入院、外来につぐ、第三の医療として在宅医療は市民権を得ていった。2000年には在宅療養を家族だけではなく社会全体で支えようと介護保険制度が始まった。ビジネスチャンスとばかりに企業も介護事業に参入してきた。そして今、住み慣れた地域で最期まで暮らすために地域包括ケアシステムという新しい仕組みが国家戦略として推進される時代となった。(次回10日)

とちぎの風